PROJECT

音楽のパフォーマティヴな実践と公共性

文
寺田吉孝

共同研究 ● マイノリティと音楽の複合的関係に関する人類学的研究（2008-2011）

この共同研究の趣旨や目的の概要については、本誌129号ですでに報告したので、ここでは2010年度に行われた発表の一部を紹介することによって、具体的にどのような議論が行われたのかを報告する。発表された事例は多岐にわたるため、ここではその一部だけを報告することを初めにお断りしたい。

マイノリティと音楽に関する研究の中で、ジェンダーおよびセクシュアル・マイノリティは研究が遅れているテーマの一つであり、この共同研究でも可能な限り多くの事例を取り上げるように心がけている。中村美亜（東京芸術大学）は、セクシュアル・マイノリティによる音楽イベントの分析から、音楽を実践する行為やその行為が行われるシステムが、音楽の内容とどのように関連するかを問う。ここで問題とされるのは、狭義の音楽実践ではなく、音楽がつくる時空間やそれに基づく記憶の共有の重要性である。中村が調査した「プレリュード」は、LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）の活動集団、東京プライドが主宰するイベントである。多様なセクシュアリティをもつアーティスト、演奏団体が参加するこの音楽公演は、2005年以降毎年開催されており、第6回目に当たる2010年には演奏者が200人を超える大きなイベントに成長した。ここで演奏されるのは既存の楽曲がほとんどであるが、その選曲や歌詞に独自の意味づけや読み替えが行われる。たとえば、チャイコフスキーの曲が選ばれる理由の一つは、この著名作曲家がゲイであったことがゲイ・コミュニティでは比較的よく知られているからだ。しかし、彼の楽曲をLGBTのイベントという脈絡の中で演じることの重要性は、主流ヘテロ社会の音楽文化として伝承されてきた楽曲が、実はその中で周縁化・非可視化されてきたゲイ文化の産物でもあった点を知識として伝え・再確認するだけでなく、その事実を鳴り響く音として演奏者や観客が身体を通して実感する点にある。中村は、このようにパフォーマンスを通して身体的に時空間を共有することの重要性を指摘したうえで、主流社会における公共性から排除されるセクシュアル・マイノリティが、パフォーマティヴな実践を通して代替の公共性を創りだす営為として「プレリュード」を位置づける。また、声高にマイノリティ性を主張したり主流社会を批判したりしない「プレリュード」の「静かな政治性」の中に多数派にも開かれた新しい公共性を獲得していく可能性が潜んでいるという。

「プレリュード2010」のプログラム表紙。

砂川秀樹（特別講師、エイズ予防財団）は、東京で始められたゲイのエイサー・グループの事例から、セクシュアリティとエスニシティにおけるマイノリティ性の交錯を検証する。エイサーとは、元来沖縄の盆行事の一部として行われていた演舞であるが、県外の沖縄人コミュニティだけでなく、沖縄出身者以外にも人気があり、現在では沖縄を代表する芸能であると広く認知されている。では、エイサーという沖縄の民族性が前面にでる演舞がゲイ・コミュニティにおいて一定の位置を確立しつつある事実をどうとらえるべきなのか。メンバーには沖縄出身者が比較的少ないため、ゲイである沖縄出身者がゲイ・コミュニティ内において民族的なマイノリティ性を主張するために始めた実践とは考えにくい。砂川は、メンバーがグループに参加する動機として語るエイサーの「かっこよさ」はジェンダー化されており、彼らがエイサーの「男らしさ」に惹かれるのは、「ゲイは弱々しい、女っぽい」というイメージに対する抵抗の表現でもあるという。エイサーが「男らしい」芸能と位置づけられるのは1950年代に沖縄で始まったコンクールに端を発するという歴史的事実はさておき、ゲイによるエイサーの実践はヘテロ社会で醸成された男性性を用いてステレオタイプに抵抗する試みともとれるし、逆に、その概念を利用するがゆえに、ジェンダー・セクシュアリティの多様性を認めないヘテロ社会を容認する危険性をはらむ営為だと解釈することもできる。さらに砂川は、日本の主流社会において、「沖縄」はエスニシティ、「ゲイ」はセクシュアリティにおいて、それぞれ周縁的であり、そのようなマイノリティ同士の親近感が両者を結びつけている可能性を示唆する。周縁性のシンボリズムが契機となって、他のマイノリティ集団の音楽を取り入れる事例は他にも見られるため、今後の比較研究を期待したい。

エイサーは海外でも活発に演じられており、様々な新しい実践の形態と意味づけが生まれている。城田愛（大分県立芸術文化短期大学）は、ハワイで演じられるエイサーのパフォーマティヴな側面に注目する。初期の移民社会においてオキナワン・ボン・ダンスと呼ばれたエイサーは、自文化への再評価が高まりを見せた1960年代から70年代にかけて、沖縄系の文化的シンボルになったという。それ以後、エイサーはハワイの多文化的状況を反映してハワイ化・アメリカ化され、ハワイにおける文化混淆（ハワイアン・フュージョン）の重要な構成要素となっている。沖縄系と非沖縄系との通婚率が高くなるにつれ、複合的な民族的出自をもつ者が増加しており、それに伴いエイ

「ルーツ」を意識してデザインされたマウイ琉球文化会のTシャツを着たオキナワンの踊り手(2009年、マウイ島、森田真也撮影)。

サーの演者の民族的アイデンティティが多様化するとともに、エイサーと他の音楽ジャンルとの混淆が加速化している。このような移民社会の多文化的状況を分析する視点として城田が提唱するのが「ミグリチュード人類学」である。ミグリチュードとは、インド系ケニア人の詩人・パフォーマンスアーティストであるシャイルジャ・パテルが、ネグリチュード(黒人の文化や心性を肯定的にとらえる文化運動)、マイグラント(移民)、アティチュード(考え方・行動様式)を合成した造語である。その要点は、移民たちが作る政治的・文化的空間を母国と移住先の中間形態と考えるのではなく、その独自性(母国や移住先との差異)を創造力の源泉としてとらえなおす見方である。この立場に立てば、ハワイで演じられるエイサーの受容や変化が、「本物の」「伝統的な」エイサーを尺度として評価・批判されることはない。また、混成化の例としてあげられるエイサーとフラの共演を、ハワイにおける文化混淆を反映する現象ととらえるだけではなく、パフォーマティヴな実践が重層的なアイデンティティを身体の感覚として実現化、具体化する力をもつと考える可能性を示している。

エイサーはまた、日本国内の沖縄人コミュニティでも頻繁に演じられている。筆者が調べた大阪の沖縄人社会では、1970年代にエイサーが始められた。出稼ぎ先である大阪で差別され、言葉にしがたい精神的圧迫を受けた青年たちが、エイサーを演じることで、主流(ヤマトゥ)社会で生きる息苦しさから解放される時空間を作り、自己を表現する可能性を見出した。しかし、エイサーが外部に向かって沖縄文化を示しやすい指標であるがために、彼らの活動に対するコミュニティ内の反応は一様ではなかった。主流社会と同化することで一定の成功を収めた、もしくは差別を回避してきた人々は、エイサーの上演を「沖縄の恥」として強く反発した。ここで争点となっているのは、音楽・芸能ジャンルとしてのエイサー自体やエイサーを伝統的な脈絡からはなれて演じることの可否ではなく、公の空間におけるパフォーマティヴな実践の政治性である。コミュニティ内の反発は、公の空間を沖縄の指標(音、衣装、振り)でパフォーマティヴに満たす行為が、主流社会の公共性への挑戦であると解釈されることへの危惧に由来している。では、マイノリティ(沖縄人)の存在を知識としてもつことと、彼らの身体が発する音や動きとして体験・共有することはどこが違うのだろうか。先に述べた中村らの議論にも見られるように、身体を介するパフォーマンスは、公共性の生成・維持に一定の力をもっていると考えられ、それゆえマイノリティと音楽の関係を考える際の重要な論点の一つとなるであろう。

本研究では、ここで紹介したような事例を積み重ねながら、マイノリティと音楽の関係の広がりや、その関係の複合性・重層性と音楽実践のつながりについて検討してきた。これまでに20件以上の事例報告が行われ、在日朝鮮人、被差別部落の太鼓奏者、日本人と日系人のジャズ演奏家、北米の日系およびカンボジア系移民、フィリピンの中国系住民、インドネシアのスンダ人やバリ島のムスリム、インドの不可触民、オーストラリアやマレーシア先住民、バヌアツのストリングバンド奏者など、多様なマイノリティ性をもつ集団と彼らの音楽実践について議論を行ってきた。また、音楽と身体に関する理論的考察やマイノリティ研究における映像メディアの有効性に関する議論もあわせて行った。2011年度はこの共同研究の最終年度であり、これまでの蓄積をもとに暫定的な一般化・理論化を行ったうえで今後の展開につなげたい。

てらだ よしたか

民族文化研究部教授。民族音楽学専攻。インド、フィリピン、日本など、アジアの音楽がグローバル化の中でいかに変容するかに興味をもつ。マイノリティと音楽に関する研究における映像の果たす役割についても関心があり、制作番組に、『大阪のエイサー:思いの交わる場』(2003年)、『怒:大阪浪速の太鼓集団』(2010年)などがある。